

## 学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	木村 由香
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	環情博甲第2142号
学位授与年月日	令和2年3月24日
学位授与の根拠	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻
学位論文題目	高齢者の終活への取り組みとサクセスフル・エイジング
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 安藤孝敏 横浜国立大学 教授 志田基与師 横浜国立大学 教授 周佐喜和 横浜国立大学 准教授 長谷部英一 桜美林大学 教授 長田久雄

## 論文及び審査結果の要旨

本学位論文は、終活への取り組みが高齢者にとってどのように位置づけられ、いかにして自らの人生に対するポジティブな視点、すなわち今後の生き方・展望へとつながっていくのかについて解明し、サクセスフル・エイジングに資する終活への支援のあり方を検討したものである。

研究Ⅰでは、日本の社会において、近年の終活という動きはどのように捉えられ広められているのかについて把握するため、マス・メディアのうち、特に新聞記事に着目し、終活のどのような面が注目され、どのように取り上げられてきたのかについて明らかにした。終活に取り組む人々にとって、終活にはどのような内容が含まれるものと考えられているのか、その具体的項目を定義する必要があった。そこで研究Ⅱでは、終活において代表的な道具であるエンディングノートの分析を行い、終活の項目を設定した。次の研究Ⅲでは、エンディングノート作成を行う高齢者への聞き取り調査を行い、研究Ⅱで得られた終活の具体的項目の整理を行うとともに、行動のきっかけと目的、そのプロセスを明らかにした。研究Ⅳでは、研究Ⅲの成果を元に、より広範囲の高齢者を対象に質問紙調査を行い、高齢者の終活への意識と行動実態を明らかにした。すなわち、終活が高齢者の生活に及ぼす影響を明らかにし、生活満足度を高めることにつながる終活とするうえでの課題と、終活を進めるために必要な支援のあり方について考察した。研究Ⅴでは、研究Ⅳの結果を受け、終活と生活満足度との関連がみられる高齢者層、特に独居高齢者を対象にインタビュー調査を行うことで、生活満足度を高める終活に関わる要因について具体的に検討・整理した。

上記の研究Ⅰ～Ⅴにより、以下の成果が得られた。

## (1) 終活の具体的項目の設定

研究Ⅱにより、終活の具体的項目として、全9項目(「医療・介護の意思決定」、「葬儀・墓の内容決定」、「親しい者への伝言作成」、「財産整理」、「持ち物整理」、「経歴作成」、「連絡先作成」、「相続内容決定・遺言作成」、「自分史作成」)が得られた。そのうえで、調査内容に応じて、「医療・介護の意思決定」を医療と介護それぞれに分割するなどのような工夫が必要であろうことを踏まえ、研究Ⅳにおいては、プレ調査を行った上で、その他(自由記述)を含めた全16項目を設定するに至った。

## (2) 高齢者の捉える終活の姿

① 高齢者にとっての終活像：高齢者にとって終活とは、他者に迷惑をかけないという意識と、自らの力でできることをしたいという自尊心から成っていた。終活とは、「自らの老後・死後について、己ができることとは何なのか？」について知り、可能ならば実行に移すことで、これか

ら先の自分に何かあったとしても対応ができる、そして周囲にも対応してもらえらるであろう、という意識によって成り立っていると言えよう。それが自らの老後・死後への不安の軽減につながり、未来展望へと広がるとき、自らの今とこれからの生活の充実へとも意識が繋がっていくと推察された。

② なぜ終活を行うのか：なぜ終活を行うのかといえば、家族・友人等に頼りきれない、密には話せない、あるいは、心理的にせよ物理的にせよ話すことが難しいからこそ取り組む、という側面がうかがえた。この点は、大いに留意すべき点であった。終活をはじめとする老後の備え、死後の備えについては、とかく「家族と話すことが大切」のように語られることが多い。本人の希望を誰かに伝える必要がある以上、確かにそのとおりではあるのだが、それがたやすく叶うならば、そもそも、このような現象が「終活」という名前を冠されるほどのものとはならなかっただろう。

### (3) 終活が及ぼす影響としての独居高齢者の生活満足度及び未来展望

本研究において、終活が及ぼす独居高齢者への影響として特に明らかとなったのは、①独居高齢者が終活に取り組むことで生活満足度が上昇する可能性、②独居高齢者にとっては、終活への取り組みを充実させ、さまざまな備えを進めることで、未来展望が開けていく、という2点であった。

### (4) サクセスフル・エイジングにつながる終活とするための課題と支援のあり方

① 「不安」を煽るような形で行動を促すことは、ごく短期的には終活に取り組む動機づくりとして効果を示すかもしれないが、結果として終活を続けたり、生活の質を向上させたりといった根本的な部分に対しては負の影響を及ぼすことになる。終活における支援では、高齢者の属性を考慮し、その人が感じている不安を小さくする可能性をしっかりと分かりやすく示すことや、終活に取り組むことで得られる安心感を想像してもらい、将来への不安を明るくすることが重要であると言える。

② 「財産の整理や記録」「物の片付け」は、終活だと思ふ項目、取り組んでいる項目、取り組みづらい項目のいずれにおいても1位・2位を占める、終活の代表とも言える具体的項目となっていた。この項目に取り組む効果として、現状把握を促すことがあげられる。また、生活に即した終活という、高齢者の終活像を考えると、終活の手始め、取り掛かりとして非常に効果的な項目とも言える。どの終活の具体的項目が、その人の持つ不安や悩みにとってどのような効果をもたらすのかをしっかりと分かりやすく示し、将来のイメージを形作ることを手助けする支援が求められていると言えよう。

③ 終活においては、講座や相談できる先が非常に効果的であることが伺えた。高齢者、特に独居高齢者の持つ不安について、終活に関する知識はプラスに働くこともあればマイナスに働くこともあった。そこで、知識を増やすことが自信につながるような形となるような仕掛けが求められる。終活を続けること、そして知識を蓄え活用できるということの2点を満たす必要がある。

本研究により、高齢者の終活、こと独居高齢者の終活について、その影響と支援すべき内容のあり方について明らかにすることができた。今後は、より多くのケースを分析・考察していくことが求められていると言える。また、終活に関わる民間企業などとの連携と、サービス、商品の検討が求められる。行政や支援団体との連携と、地域性を反映させた支援内容の探索も必要であろう。そして、本研究では限定された数での結果となった、未来展望と終活の取組について、より広い範囲で、定量的な調査、検討を進める必要がある。

本学位論文は、高齢者の終活、特に独居高齢者の終活について、今後の生き方・展望などの取り組むことの影響と支援すべき内容のあり方について解明できた点に学術的な貢献が認められる。審査委員による本学位論文の内容に関する質疑に対して適切に回答できたこと、その他の学力・業績と合わせ、専攻の学位審査の基準に照らして博士の学位の授与に十分であると結論し、審査員は全員一致して、博士（学術）学位に値すると判断した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。